

第 38 回 安田女子大学・安田女子短期大学 エッセイコンクール

自由部門

優良賞「現代における書道のあり方とは」

書道学科 3 年 1 組 横山めぐみ

私は現在大学で書道を学んでいる。6 歳の頃から書道教室に通い、地道に練習を積み重ねてきた。そして高校生の時に安田女子大学文学部書道学科卒業生の書道の先生に出会った。それがきっかけで、いつしか書を本格的に学び、将来は書道教育に携わりたいという思いが強くなっていった。しかし現実はそんなに甘くない。ここまで続けてきたということは最大の強みだと思って入学した私は、周りのレベルの高さに啞然とした。私はあまりにも無知だった。とにかく周りに食らいつくの必死で、1 年間は全く思うような作品が書けなかった。初めての大きな挫折を経験したが、決して絶望したわけではなかった。刺激的な日々はより私の書道教育への思いを強くした。そして学年が上がるにつれ教育関連の授業の履修が多くなって感じたことがある。現代に書道は果たして必要か。時代は移り変わり一気にデジタル化が進み、ペンや筆を持ち、紙に書く作業は非効率的とされる社会で書が切り拓く未来とはどんなものだろうか。

古い歴史を見れば書は多様な発展を見せてきた。しかし、時が経てばどうだろう。何千年前もからある文字を私たちは紡ぎ続けて書として残してきたはずなのに、日本では今や書の衰退が懸念されている。もっと若者に触れてもらうことが必要なのに、書を学ぶ人々は減ってきているのだ。幼いころに書道教室に通った経験がある人や学生の頃書写の授業があった人は多いかもしれないが、スマートフォンやパソコンで文字を連ねる時代に、手書きで文字を記す余裕は現代人には無いのかもしれない。書を学んでいる私自身でさえ、これから全ての授業において手書きでレポートを提出してくださいなんて言われたら発狂する。書き続けることがどれだけ大変で集中力がいることか、書道学科の一員として学び続ける中で改めて思い知らされた。

一方で、生活の中で書と生きることは心を豊かにしてくれると感じた。墨が織りなす無限の可能性、そして生み出される空間は一つのデザインとして人々の心に問いかける。私は昔からポスターなどのデザイン案を考えたり、プレゼンテーション資料の作成をしたりすることが得意だ。元々絵を描くことが好きで、中学生の頃は 3 年間学級旗のデザイン案が代表に選ばれたり、卒業文集のページデザインを先生に頼まれたりもした。幸運にも自分の好きを才能だと認めてくれる人に恵まれ、いつのまにか自分の長所になっていた。そうした表現力が培われたのは、周りの環境もあるが、一番は書道の経験によるものであると考える。絵を学んできたわけでもないし、美術部だったわけでもない。しかし誰かに見てもらうことを考えたとき、どういう印象を与えたいかということや、どうしたら見やすくなるか、どうし

たら人の目を惹きつけられるかということを常に考えて書に親しんできた。真っ白な世界に自由に何かを生み出すことや、白と黒で一つの世界を表現することでこれらの力が培われ、感性を豊かにし、自分の見える視野も広がっていった。

芸術分野はなかなか理解されにくく、時には何がいいのかわからないといった声を直接耳にすることもある。学ぶ上で答えのある世界ではないからこそその難しさがあるのと同時に、その難しさについて夢中になって知れば知るほど奥深いものを感じることができるものでもある。近年では海外での需要も高い。中国書や日本書などが様々な国でアートとしての書は受け継がれ、多くの人に親しまれている。私はどんなに書が衰退していると言われていても完全になくなることはない考える。江戸時代には江戸文字が生まれたり、その後も前衛書道など抽象的な表現からなる新たな分野が生まれたり、書は形を変えながら伝わっている。最近知った中で一番驚いたのは、高齢者のリハビリテーションでも書道が生かされているということだ。書くという作業と文字を考える作業を同時に行うことは脳に刺激を与え、集中力や物の認知力を高めることにつながる。このように書道は国境を越えてアートとして親しまれたり、人々を支える資源になったりしている。またこれを知ったことで、書道に対して「書く」ということをいつも中心に考えていたが、言葉のすばらしさを伝えることができるという強みもあると学んだ。言葉に秘められた思いや言葉の持つ魅力を最大限に引き出し、見る人の想像力を掻き立てる。

書道を学ぶ過程で上手いか下手かということは、もちろん重要ではあるし、多様な視点の中の一つとしてあっていいだろう。ただそのような評価を超えた先にある書道芸術の自由なあり方こそ、将来的に書道を存続させる鍵になると考える。書道が様々な形で受け入れられ多様な恩恵をもたらしていることから、必要性は十分にあり、これからも時代とともに変化しながら伝統文化として生き続けるだろう。私はこれからも日々学び続ける。まだまだ私自身は試行錯誤することも多いが、書を通じた表現が生み出す世界を問い続ける。